

第四百七回 青葉会

令和二年三月二十六日(木) 午後二時〜五時 文京区民センター会議室

〈選者〉 ◎ 川口孤舟

〈出席者〉 今井紀久男 久米五郎太 小西弘子 佐藤ただしげ(忠重)

〈投句〉

伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 在間千恵 朱牟田恵洲 土谷堂哉
豊田ゆたか 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛
渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 安部眞希子 柿崎忠彦 在間千恵 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎
早川允章 福島正明 星田啓子 松崎滋 村田くに子 山本三恵

《互選句》

十二点 ◎ 雨の音いつしか消えてなごり雪

忠重 (紀・忠・孤・五・弘・千・孝・
龍・敏・允・啓・滋・く)

六点 独り居の卵かけ飯二月尽

恵洲 (眞・忠・允・滋・く・三)

伊能記念館

春疾風蝦夷の果てまで一歩から

堂哉 (眞・忠・敏・允・正・く)

五点 ◎ 花の雨友の棺のなど軽き

弘子 (紀・孤・五・敏・允)

◎ 免許返納桜並木をとぼとぼと

健介 (忠・孤・た・千・滋)

年老ひてももの皆いとし春の風

ゆたか (紀・五・孝・龍・正)

(◎老ひて↓老いて)

妖しさに充ちし夜桜隠し酒

盛雄 (堅・千・孝・龍・正)

米朝五年祭

四点 ◎ はんなりと春を招びをる米朝忌

紀久男 (弘・敏・く・三)

◎ しゃぼん玉宇宙は丸い星で成り

忠彦 (孤・五・龍・啓)

孫折りし紙雛未だ捨てられず

全 (紀・た・孝・龍)

三月の野球少年走り出す

弘子 (紀・孤・五・啓)

◎ 花の昼島影薄き相模湾

全 (孤・千・允・滋)

◎ 月命日墓石に梅の散りかかる

千恵 (堅・孤・弘・た)

響き合ふ本絹古布(ほんけんこふ)の吊しびな

啓子 (紀・龍・く・三)

牡丹雪望遠の視野填めけり

亜也 (紀・孝・啓・三)

鐘楼の海見おろして春霞

けい子 (五・た・滋・三)

原発の陰にひっそり土筆伸ぶ

盛雄 (眞・紀・敏・正)

三点 ◎ 人影の疎らな町も花盛り

そらお (眞・紀・く)

◎ 学校がお休みなんだよしゃぼん玉

弘子 (紀・忠・孤)

呼び出しの声朗々と春の夕

五郎太 (弘・た・三)

学位記は二ヶ国語なり別れ雪

全 (眞・紀・正)

◎ 花見酒うしろめたさとうらはらに

亜也 (紀・忠・孤)

二点 ◎ 新しき墓石の上に花の影

そらお (眞・允)

「ごほん！」聞き警戒心の春憂

忠彦 (紀・た)

春うらら静まりかえる隅田川

千恵 (弘・た)

小雨道香り寄越すや沈丁花

全 (堅・啓)

靖国に数輪咲きて春の雪

全 (紀・五)

佳き戒名なれど帰らぬ春寒し

恵洲 (紀・敏)

春場所や「よいしょ！」聞こえぬ土俵入り

堂哉 (紀・千)

一点

- ◎ 綿菓子のように膨らむ紫木蓮
昇 (孤・弘)
- ◎ 障子越し暮の声聞く寝覚めかな
天牛 (弘・啓)
- ◎ 春場所や四股踏む音のよく聞こえ
全 (紀・孤)
- 呆け自覚辛夷ふくらむ夕餉かな
紀久男 (三)
- 自粛とやら独り稽古の春の汗
全 (孝)
- 薄墨の色の薄まる桜花
五郎太 (紀)
- (◎…桜の傍題に「桜花」は見当たらず↓「夕桜」)
全 (弘)
- 雪解の水かさ高しセー又川
弘子 (堅)
- 場場と子へ餌を運ぶ父鴉
忠重 (千)
- タンポポの花も思はぬ雪背負ひ
(◎…季重なり)
- 花見時新型コロナで冷え冷えと
全 (堅)
- (◎…季重なり↓「花冷え」)
春場所や伊之助朗朗勝ち名告
堂哉 (五)
- ◎ 花咲いて水鳥うきうき川遊び
ゆたか (滋)
- (◎、弘…季重なり)
招かれざる異国の客や春嵐
昇 (た)
- つくしんぼたつた三本庭の隅
啓子 (堅)
- ケーンケンと雉子(きぎま)鳴く野辺母の故郷
全 (紀)
- 春の日やコロナウイルス立ち騒ぐ
規雄 (紀)
- たんぽぽや散歩の犬のお気にいり
けい子 (紀)
- ◎ 「季重なり」をOKとする結社も結構あるが私は採らない…孤舟選者より

* * * * *

● 次回青葉会

四月二十三日(木) ウェブ句会

三人の出席予定者と相談し、今月は偶々区民センター使えなくなったこともあり通信だけの句会にすることとしました。

投句↓選句↓句会記録 作成となります。

▲投句二句以上五句まで

4月23日までメール・FAX・郵送でお願いします。

令和二年四月八日

以上 文責 紀久男



令和二年三月 青葉会報

一、今月は新型ウイルス感染を用心して出席4名、投句14名。命知らずとそしられた4人は長机を各々使い余裕を持ち、中味の濃い(?)句会となりました。

二月末退会の一灯さん寄贈の高級煎餅各種(長岡の「新潟味のれん本舗」)、弘子さんのうなぎパイ(浜松・春華堂)、小生持参(三恵さんから年末恵贈)の大吟醸「能登路」(石川県・久世酒造:米作り一貫)を賞味しつつ、五郎太さんの司会で御覧のように入会間もない忠重さんがダントツの高得点でした。

回覧は(一)天牛さん・孤舟選者・眞希子さん・猛さんからのFAX(二)一灯さん・隆さんからの手紙(三)合同句集送呈先からの反響：清水宏員さん・今泉政春さん・酒井尚平さんらのお手紙等多数(四)社友会事務局からのHPに句集紹介記事掲載依頼FAX等。
話題は丸紅の大赤字報道、東京五輪延期で團十郎襲名も右ならい、「萬緑」↓「森の座」
「主宰の横澤放川師の日経俳壇選者就任など。」

二 関係者近詠

我も欲も勝手に離れ蕪甘し 眞希子 湿原の風の背に乗る赤蜻蛉 孤舟
連名の賀状結婚望みをり 全 裏切りはユダに限らじ烏瓜 全
年玉で焦がれしシューズ新人戦 全 秋更けて星空に浮く地球かな 全
礼拝へ夫はとづくに初詣 全 山茶花の散るや袂に風を聴く 全
あるもので足り満つ四日退職後 全 一穢なき宙の大河を鷹渡る 全
初縫ひの針目踊るや白布巾 弘子 | 「爽樹」 3月号
冬薔薇一人の部屋へ友帰す 全 彼のひとも家族葬とか鳥雲に 盛雄
橋二つ向かふに兜太秩父冬 全 静謐な土俵に熱気春闈ける 全
白鳥と白寿の人の笑みに会ふ 全 春眠や極楽仕様の我が寝床 健介
神宿る大樹菰巻く氏子連 陽亮 蔵書から孫に薦むる菜の花忌 紀久男
ちから朽ちてしまひし妻に匙で屠蘇 全 | きさらぎ句会 3月
若水に触るれば星座揺らぎけり 全 貫祿の齒抜け老盜春芝居 加茂紀夫
綿入れの裾のほつれも傘寿かな 全 (島田正吾の最晩年TV「鬼平犯科帳」)

失恋の記憶をふつと西行忌 允章 木の芽和長子きり出す墓仕舞 丹野敦雄
晚酌や京の香りの若竹煮 全 下校児のもつれ出てきて暖かし 全
春場所や呼出志朗ハイバリトン 堂哉 無観客音のみ響く春相撲 関島多佳子
春籠炊事手袋穴のあき 全

三 松本白鸚(先代幸四郎)の「句と絵で綴る余白の時間(とき)」
(春陽堂2019年10月¥2,200)より小生好み抄出。(金子兜太との対談も掲載しております)
| 歌舞伎は弟の吉右衛門に太刀打ちできませんが、ミュージカル(「ラ・マンチャの男」など)では売れてをるようです。余技の俳句はなかなか大したものですよ。

千年の儀千回の花役者 おぼる夜や鬼女の棲み家を訪ねけり
(平成二十年十月東大寺にて) (福島にて「安達ヶ原」を思つて)
草萌ゆる旅路を歩む役者かな しづやかに神の湯里の雪景色
花冷のもの憂き流れ吉野川 「新春」
もののふの衣擦れの音もみぢ散る 神の春とふとふたりたりたらふ
(赤穂義士終焉の地) ひと掴みほどの幸あり今日の春
初午の掛行灯や樂近し 眞実も事実も溶ける大暑かな
潔き汗の奈落に花一輪 (熱暑の名古屋キホーテを勤めて)
憂ひ顔の騎士の祈りに星しとど 鐵斎の描きしごとき雪景色
凍空にサリエリの慟哭フォルテシモ 花吹雪につつまれゆきし人想ふ
打ち上げて雪ふる街に着きにけり (十七代目勘三郎の小父を偲んで)
朝焼けに浮かびし冬のマンハッタン 寒椿散るが如くに又播磨
日盛りの裸足で帰る農夫かな (二代目又五郎さんの訃報を旅先で聞いて)